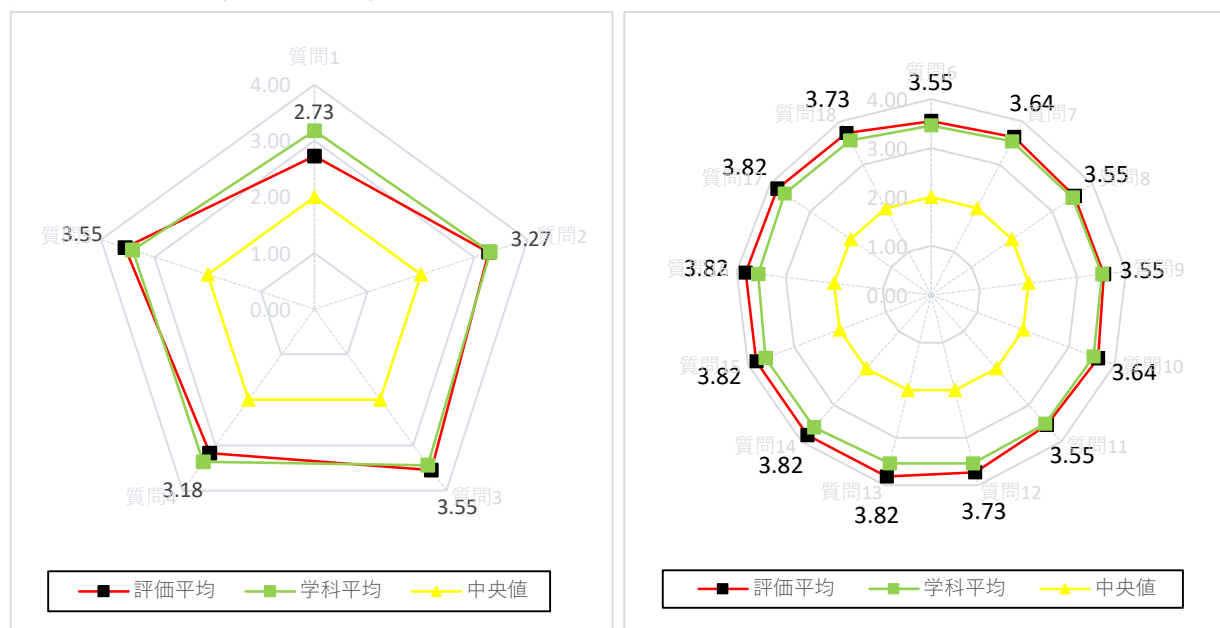


学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		あすなろう	11名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

授業評価回答数については受講者全員の回答を得た。学生自身の自己評価については、欠席回数等に関して個人のばらつきが大きい状況であった。教員への評価については、質問12～18の項目で学科平均と比して高い評価であった。

授業内容は前期は神埼キャンパスにて学科混成で行われ、後期は学科全体授業とゼミ別授業とが混在していたが、ゼミ別授業では、できる限り各受講生に個別的な声掛けを行い指導支援を行った。また、学科ゼミ担任としてのかかわりが行いにくい前期期間においても、授業時間とは別に日程を設定し、一週間の記録票を活用して学生の生活実態の把握に努めた。その中で気になる学生については、細やかに声掛けをするとともに、気がかりな状況がある場合、個別に対応するよう心掛けた。

学生からは自由記述において、あすなろうボランティア活動での成長や、授業が分かりやすかったという結果を得た。今後も、学生への公平なかかわりやレポート・発表指導等を丁寧に行っていきたいと考える。なお、前期期間のグループワーク等を希望する意見も見られていたことを、共通教育担当へフィードバックしていきたい。

(3) 次年度に向けての取り組み

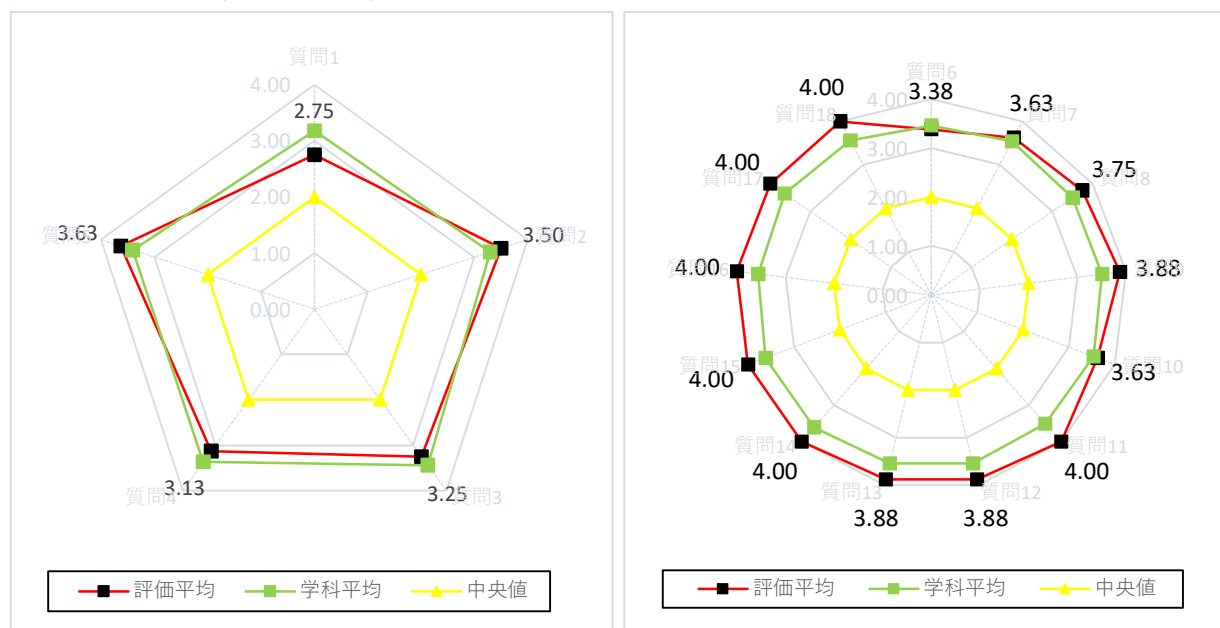
次年度も今年度同様に学科ゼミ単位での授業が開講されない前期期間においても一週間の学修・生活記録をもとにした面談を定期的に行い、学生の状況把握に努めたい。後期は各学科における授業が行えるため、今年度同様に全体へ向けては指示の明瞭さに留意し、また学生には誠実・公平に接する姿勢を重視して、教育に取り組んでいきたい。

また、一人一人のあすなろう体験実習の進捗や生活状況などを把握するなかで、気になることがあれば早めに声をかけることで、学生が大学生活を滞りなく送ることができるよう教育・支援を行いたい。

授業評価については、次年度も最終講義回で十分な授業評価回答時間を設けて回答を促していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		あすなろう	8名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

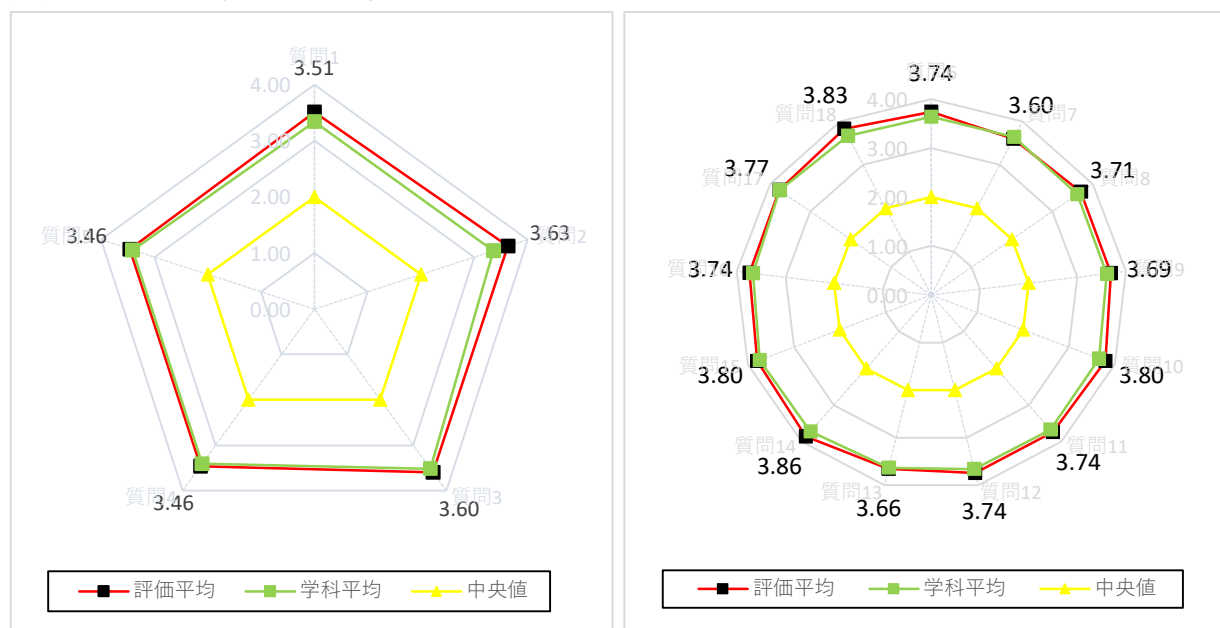
前期は神崎のため、後期から担当した。まずは、学生同士の関係性を育むため、活動を取り入れながら行った。今回、特に力をいれたものは二つである。一つは、新聞のコラムを読み、まとめるというものである。回を重ねるごとに、要点のまとめ方が上手になりつつあるのが分かった。もう一つは、自分なりの研究のまとめ方である。自分なりに研究したい資料を探して、パワポでまとめ、発表をするという活動を行った。今後も続けていきたい。

(3) 次年度に向けての取り組み

今年度の流れは、とても学生たちが参加しやすいものであった。今後もこのやり方を続けていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		心理学実験Ⅱ	39名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

非常勤講師を含む2名体制で、学生を2グループに分けて前半・後半で担当教員が交代する形式で行ったが、授業評価については教員同士連携を取り、授業最終回までに回答時間を十分確保したことで、89.7%の回答率を得ることができた。

心理学実験を授業内で実施した後、教員の指導の下に実験レポートを作成するという流れを複数回行う授業構成であり、学生の主体的取り組みが求められる内容だったことが、学生の自己評価（質問1～5）の平均より高い評価につながったと考えられる。学生の自由記述においても、「達成感や知識・自信がついた」との回答が得られた。

教員に対する評価についても、学科平均と同程度もしくは上回る結果を得た。実験施行時の説明の際の資料や説明の工夫、レポート作成にあたっての指導等に一定程度評価が得られたと考えられる。

(3) 次年度に向けての取り組み

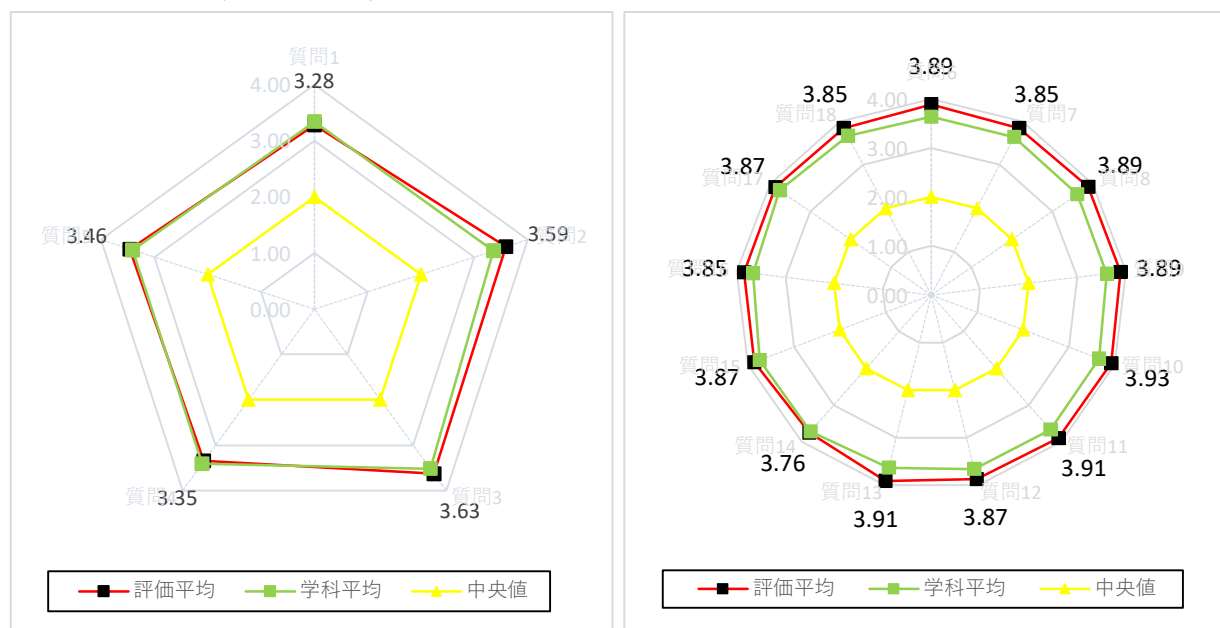
次年度以降も、授業最終回やその前の回などに授業評価に取り組む時間を十分確保することで高い回答率につなげたい。

授業の進め方や資料等についても評価が得られているため、今後も丁寧な説明や分かりやすい資料作成等に留意していきたい。

レポートにおける考察のまとめ方などについて、今後のレポートや研究でも力を伸ばしていきたいという自由記述も得られたので、令和7年度にも行った先行研究の紹介などを継続することで、様々な視点から考察につなげられるようなかわりを意識していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		児童・思春期・青年期の臨床心理学	52名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

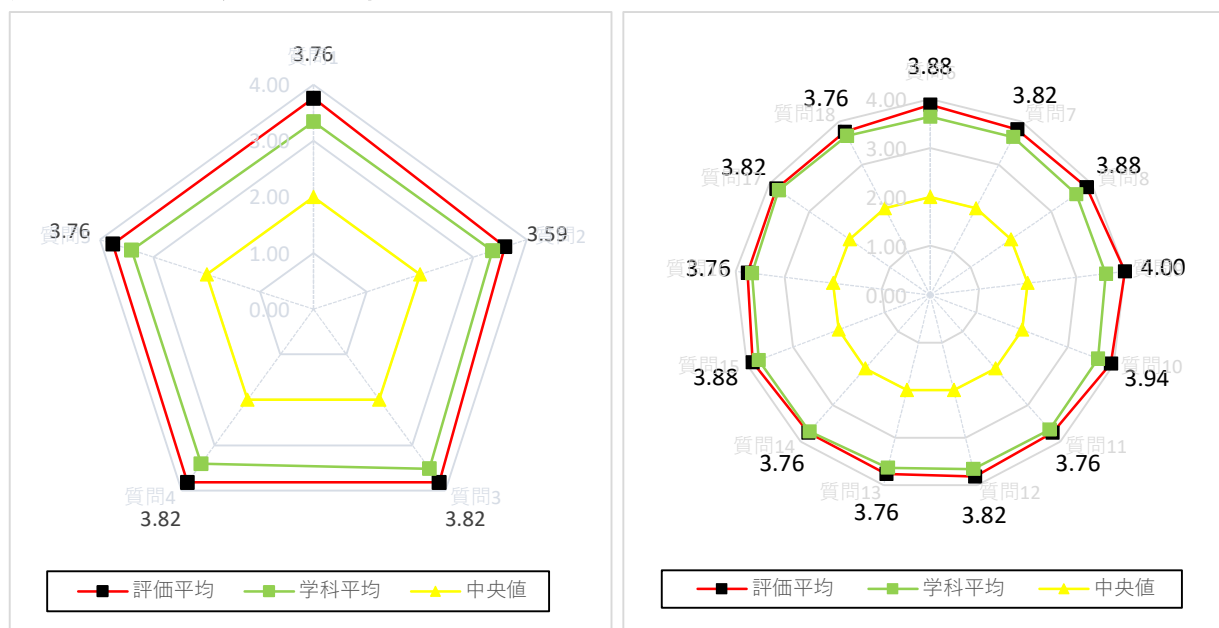
いずれの項目においても、概ね高い評価を得ることが出来た。
 具体的な事例や双方向のやりとり、実践的なワークなど、様々な教育方法を取り入れ、学生たちがより興味・感心を高められるような教育を展開していきたい。

(3) 次年度に向けての取り組み

引き続き、より質の高い教育を提供できるよう、教材研究や授業の展開方法を吟味・検討していきたい。
 希望としては、今後は、シラバスの到達度や学修成果を学生自身が振り返られるようなフォーマットを作成し、学生の学びの成果を可視化できるようなシステムを構築していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		障害者・障害児心理学	47名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

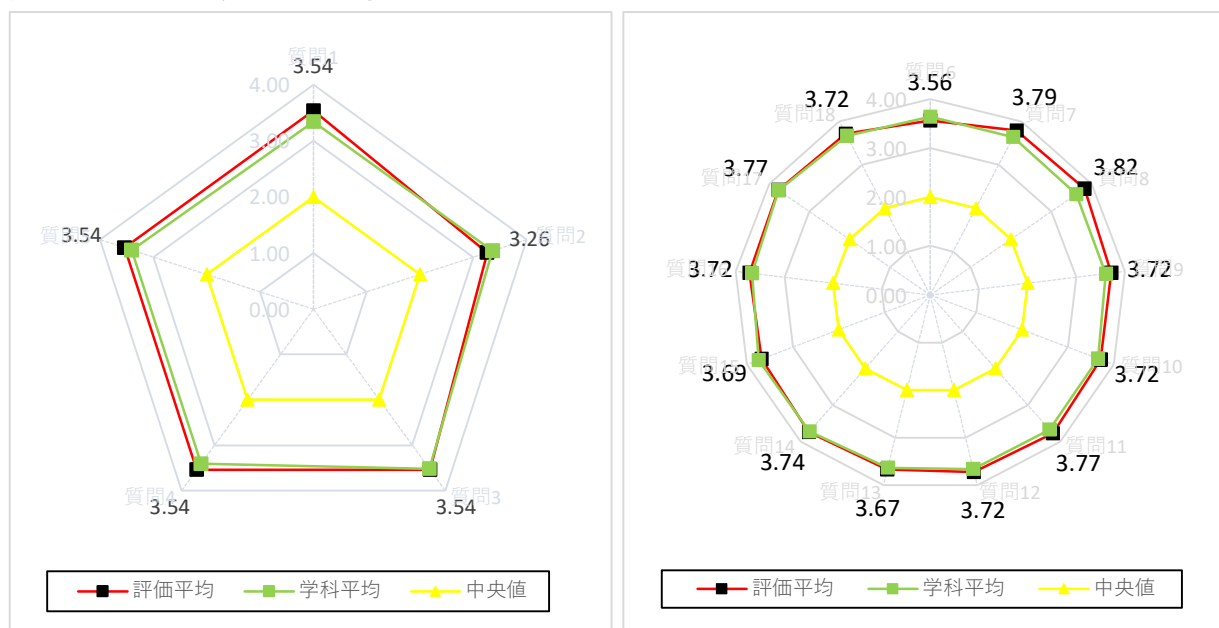
本授業の評価平均得点は、全18項目において心理カウンセリング学科全体平均を概ね上回っており、特に「授業内容の理解度」「学習意欲の喚起」「授業全体の満足度」に関連する項目では4.0前後と高い評価を得た。これは、障害者・障害児心理学という専門性の高い内容を、具体事例や実践的視点を交えながら構成したことが、学生の理解促進と関心喚起につながった結果と考えられる。一方で、比較的得点が伸び悩んだ項目も学科平均は十分に上回っており、授業運営や説明の明確さについては一定の評価を得ていると判断できる。総じて、本授業は学科内においても質の高い学習機会を提供できていたと評価できる。

(3) 次年度に向けての取り組み

担当せず。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		特別の支援を要する子どもの理解	109名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

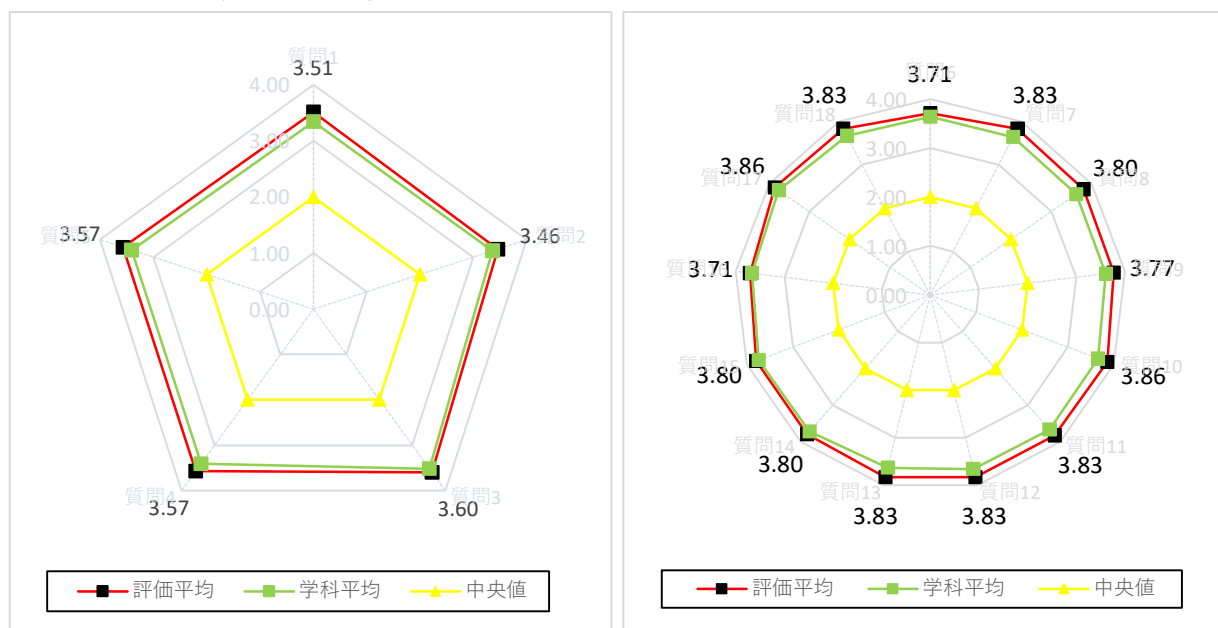
この授業は、特別支援教育の基礎となる、「特別な支援を要する子ども」へ視点を当て、どのような指導支援が重要なのかを扱っている。特に、子どもたちの心の成長に視点を当てており、アタッチメントが発達の基盤となることを学んでいる。HOW TOではなく、教育の根本を学ぶことが、今後の指導観につながると考えている。

(3) 次年度に向けての取り組み

これまでの授業の流れが、とても効果的であったと考えている。1年生の前期のこの時期に、もっとも重要なことを伝えていきたいと考える。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		福祉心理学	78名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

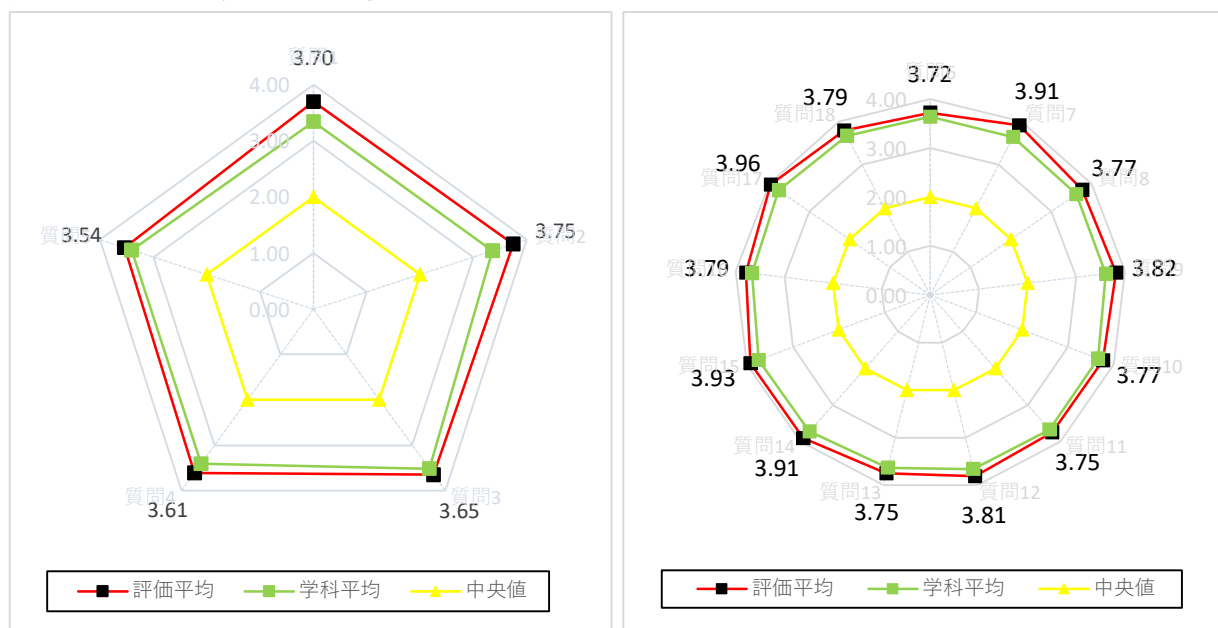
本授業「福祉心理学」の授業評価平均点は、全18項目において心理カウンセリング学科学科平均を上回っており、学生から概ね高い評価を得られたと考えられる。特に、授業内容の理解度、興味・関心の高まり、学習意欲の促進に関わる項目（7～17）において差がみられ、理論と福祉現場の具体例を結びつけた講義構成や、学生の思考を促す問いかけ、意見交換を取り入れた点が評価につながったと推察される。一方で、基礎的理解や学習負荷に関する項目では他項目と比較すると差は小さく、今後は内容の整理や段階的な理解支援について一層の工夫が求められる。本結果を通して、授業の方向性は概ね妥当であると評価しつつ、より多様な学生への配慮の必要性も確認された。

(3) 次年度に向けての取り組み

担当せず。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部 デジタル社会共創学環	心理カウンセリング デジタル社会共創学環		暮らしに潜む罠	108名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

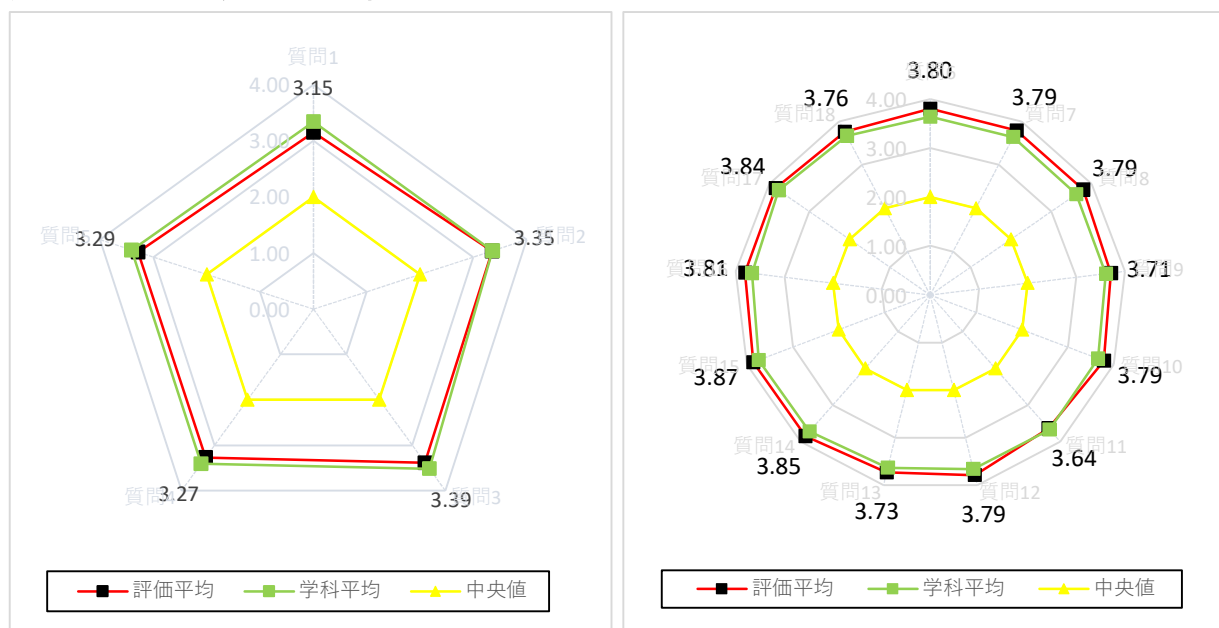
本授業「暮らしに潜む罠」の授業評価平均得点は、学環全体の平均と比較して、18項目中ほぼすべての項目で同等以上の評価を得ており、とくに項目7、14、15、17では全体平均を大きく上回る結果となった。これらは、授業内容の関心度、理解促進、主体的学習の促進や総合的満足度に関わる項目であり、日常生活に潜む心理学的テーマを具体例や事例を用いて提示し、学生参加型で進めた授業設計が一定の効果を発揮したものと考えられる。一方で、項目3や5など一部では学環平均をやや下回る点も見られ、理論的内容の難易度調整や説明の分かりやすさについては、さらなる工夫の余地があると評価している。全体として、本授業は学生の理解と関心を喚起しつつ、学修意欲を高める点で良好な成果を示したといえる。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度に向けては、引き続き生活に身近な事象と心理学理論を結びつけた授業構成を維持しつつ、学生の理解度にさらなる配慮を行う。具体的には、専門用語や理論説明について、図解資料や簡潔なまとめスライドを増やすことで、基礎理解の底上げを図る。また、理解が十分でない学生が気軽に質問・確認できるよう、ミニ確認課題や振り返りコメントの機会を充実させる。加えて、ディスカッションや事例検討の時間配分をより調整し、全学生が参加しやすい学習環境づくりを進めることで、項目3や5に関連する評価の改善を目指す。これらの取り組みを通して、質の高い学修体験と学修成果の両立を図っていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		教育・学校心理学	83名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

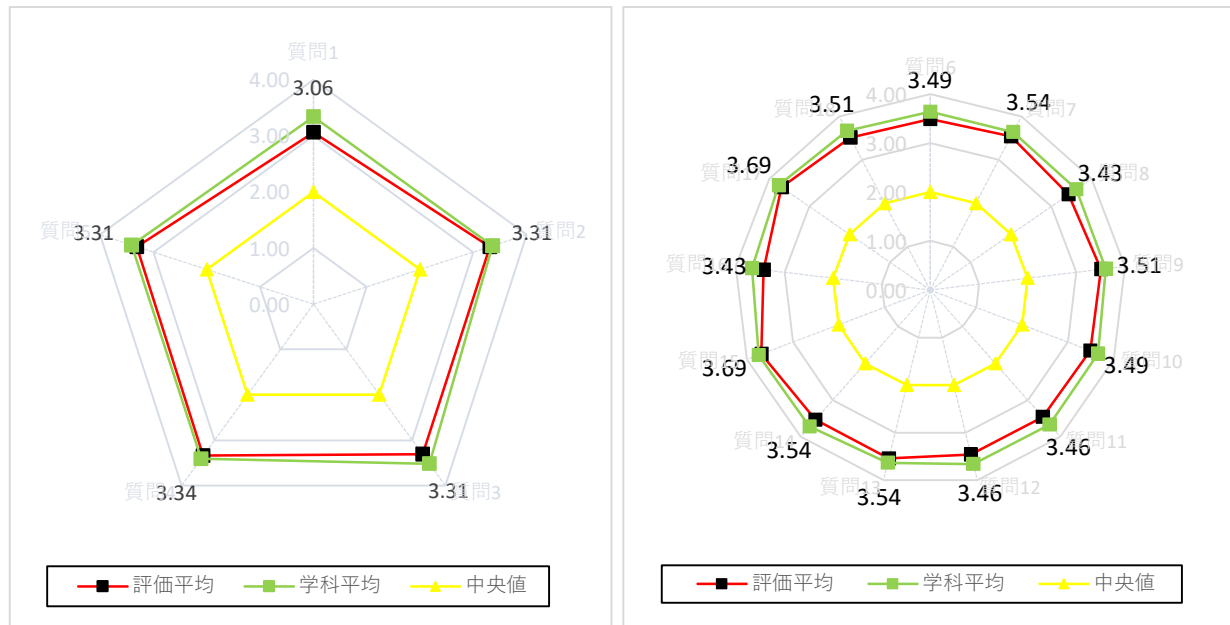
昨年度よりも評価は上がっていた。内容を一部更新していた。学生の数が多かったため、なかなか一人一人のフィードバックを丁寧に行うことが難しかったが、可能な範囲で実施出来たように感じる。もっと学生の主体性に委ねることも有ってよかったのではないかと感じた。意外にも、彼ら自身で考える場面では、意見を出し合って考え合っていた。フィードバックについては、好評であった。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度は、もう少し話し合う時間を設けるようにしたい。学生同士で話しあうことで、他者の話を傾聴し、自分の考えを相手に伝えることで、より講義の内容を深く理解することに繋がっていききたい。更新した内容にしては、一部をさらに洗練させていきたい。フィードバックについては好評であったので、引き続き実施したい。映像についても、いろいろなものを検討しながら、その時にあうものを取り入れていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		社会福祉	49名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

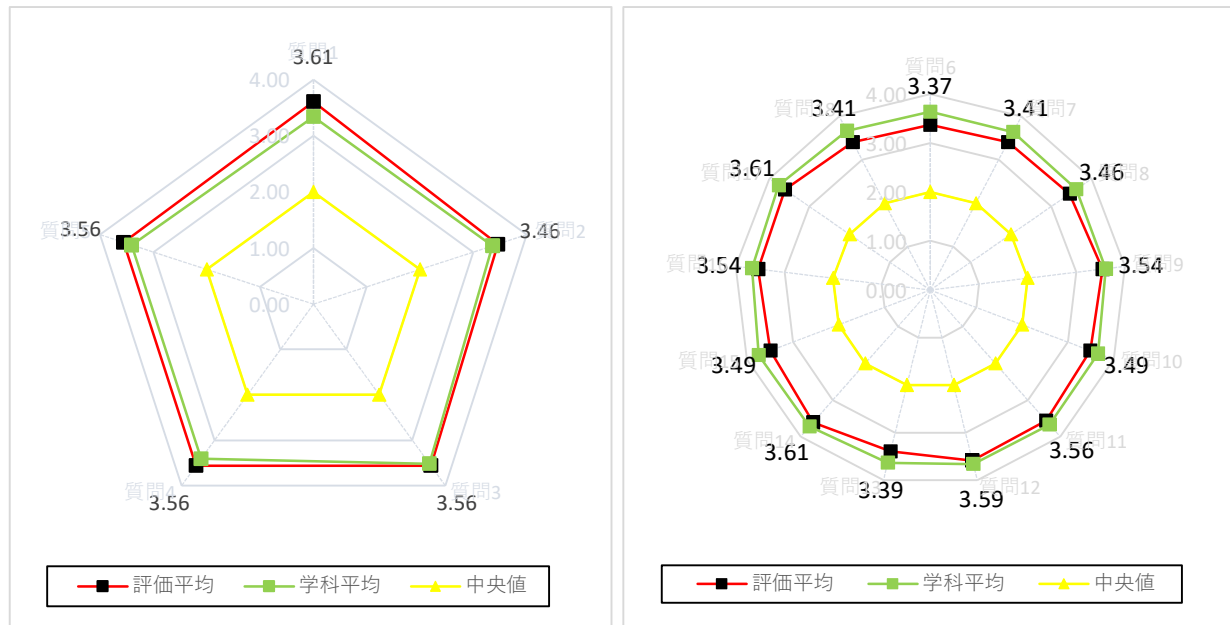
本年度より初めてこども学科で授業をすることになり、手探りでの授業状況であった。授業が妥当であったと考えている。

(3) 次年度に向けての取り組み

今年度と同様に、次年度も学生の進捗を確認しながら授業を進めていく。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		知的障害者の心理・生理・病理	70名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

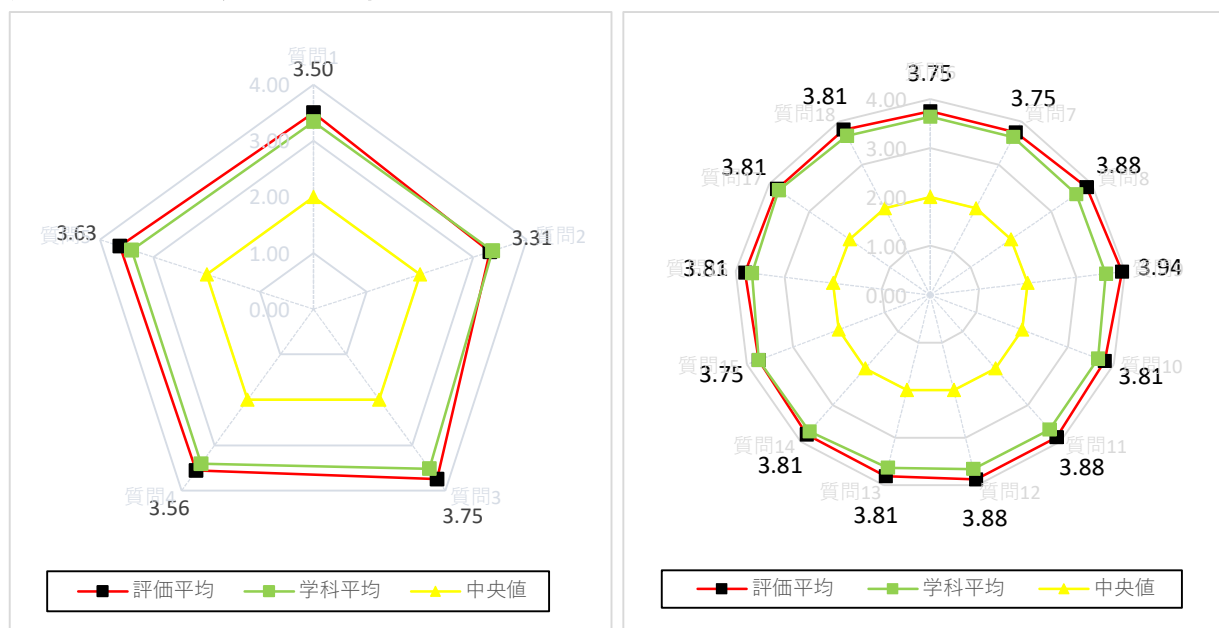
この授業は、非常勤の鈴木先生とオムニバス形式で行っている。私は主に、知的障害者の心理について授業を行った。この授業は特別支援学校教諭のための最初の授業のため、専門的な内容に触れるが、初心者でも理解しやすい内容で伝えることを心掛けた。この授業を受けた学生たちが、特別支援教育に興味をもってくれ、今後特別支援学校で働きたいという思いをもってほしいと願っている。

(3) 次年度に向けての取り組み

WISCなど、発達検査の内容を扱う授業を取り入れたが、この段階では、少し難しい気もした。そのため、来年度は、もっと幅広く、軽度から重度の知的障害の子どもへのかかわり方に焦点を当てて、授業を作り直す予定である。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		芸術療法Ⅰ（基礎理論と箱庭療法・コラージュ療法）	44名

（１）学生による授業評価結果



（２）結果の分析と評価

本講座は、箱庭、コラージュ、描画、粘土を用いて、ユング理論を背景に教示しながら学生自身が芸術療法の技法を用いて表現するものである。授業評価をみると、ほとんどの項目が学科平均より高く受講生が興味をもって授業に参加しているといえる。前期の期間、箱庭を4回、コラージュを4回、描画を3回粘土を1回全員が作成している。個人又はグループで作成し、振り返り用紙に自己評価をし自分を見つめる時間をとっている。

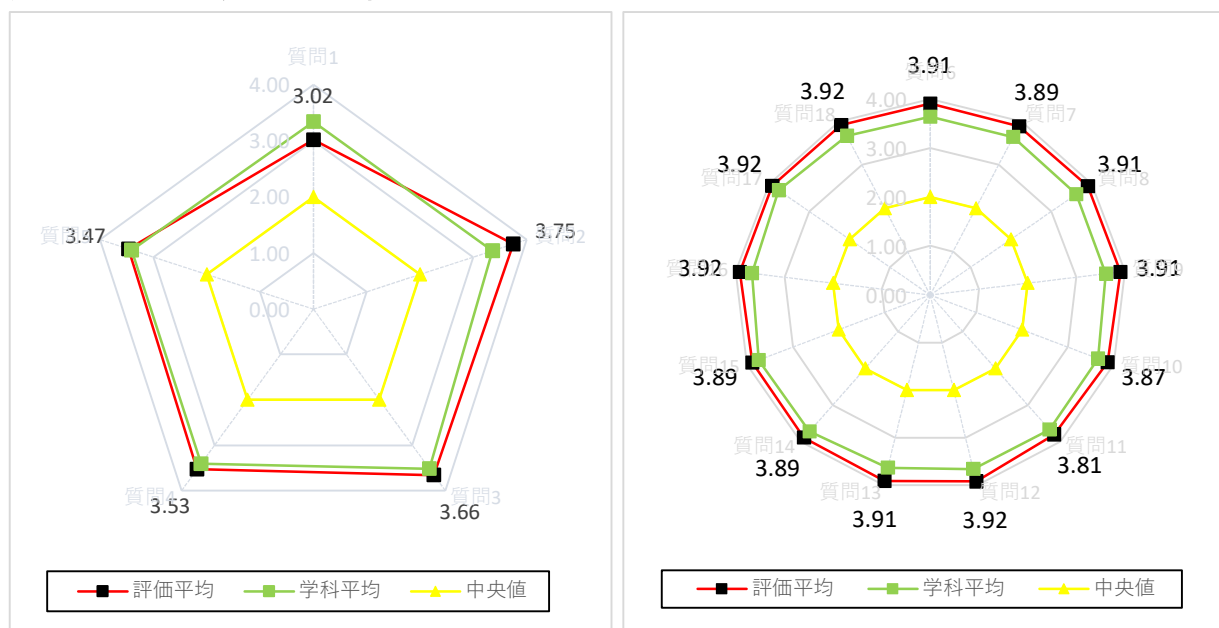
さらにグループでシェアリングを行いながら、作品を可視化しながら内省力を高める方法をとっている。不安定な青年期のこの時期に自己内省を行う事は、青年期の自我形成に役立つと思われる。授業最後の総括では、今後自分が進む方向性について考えている学生も多く見られた。このことは、この授業において客観的に自分を見つめる機会であったと思われる。

（３）次年度に向けての取り組み

次年度も今年度と同じ内容で、箱庭、コラージュ、描画、粘土を用いて実践を行い自己内省力を高めることを目標に行いたい。次年度もユングの理論的背景をもとに講義を行い理論を身に着ける授業を展開する。また、箱庭、コラージュに関しては継続して作成するため、個人のイメージの変容がどのように行われたのかをレポートしてもらい自己内省に役立ててもらえるよう指導を行っていく。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども 心理カウンセリング		子どものストレスマネジメント論	59名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

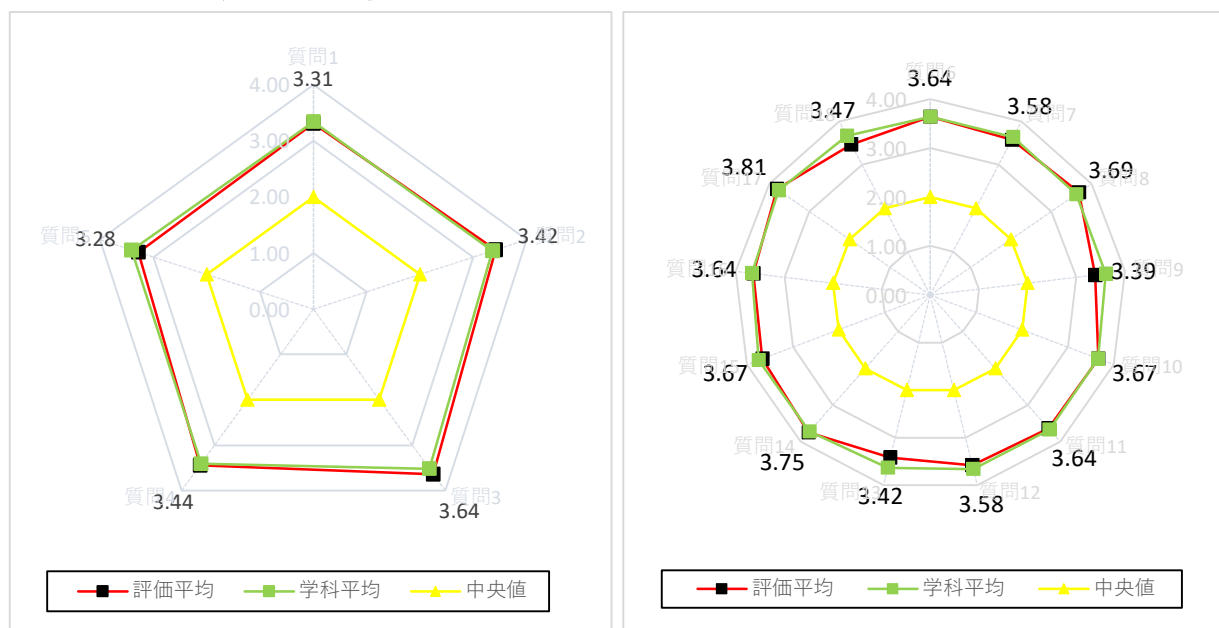
今年度は、カリキュラム移行期間ということもあり、2学年2学科合同での開講であり、受講者数も多く、アンケート回答率を上げることに苦慮した。丁寧アナウンスを重ね、授業評価アンケートに取り組む時間を確保することが今後は必要になってくる。また、授業評価に関しては、概ね全ての項目において高い評価を維持することができていたと思われる。冒頭でも述べた通り、受講者数が多いがその一方で教育の質が低下しないよう、きめ細やかな指導や教示が必要になってくると考える。

(3) 次年度に向けての取り組み

2学年2学科合同での開講ということもあり、受講者数が多くなるが、学生の授業評価を最大限上げるよう、質のいい教育を提供していきたい。机間巡回やフィードバックを丁寧におこない、授業を展開していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		遊戯療法	39名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

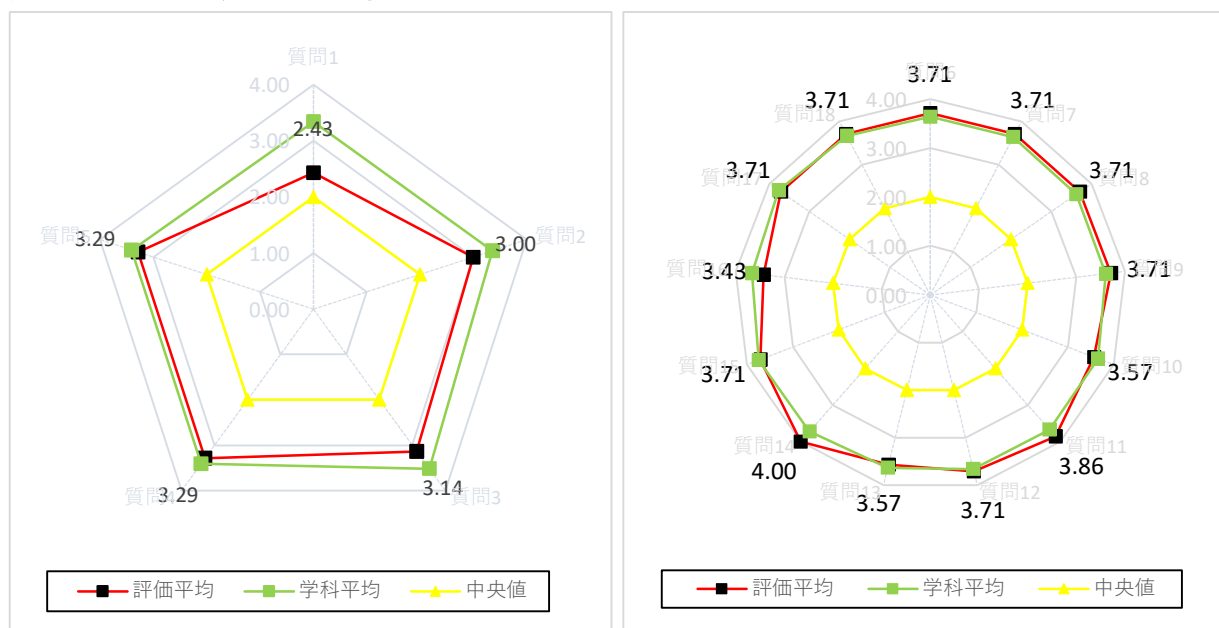
本講座は、臨床心理学の中でもより専門的な心理療法の一つである遊戯療法について学ぶ場であった。方法としては、5～6名のグループで教科書の各章をまとめて、パワーポイントを使って発表する形をとった。発表には必ず教科書内の事例を読み、その意味や背景について発表してもらった。その中で、各症例についての理解やそこで展開されている遊戯療法の実践についてまとめ発表してもらった。各グループとも、とても熱心でパワーポイントの作り方も工夫がみられ感心させられた。遊戯療法について、当初は「遊び」だけのイメージであったが、遊戯療法という学術的な意味合いも理解することができるようになり多くの学生が興味をもってくれた。特に個別的に質問に来たり、児童にかかわるためのアルバイトやボランティアについても訪ねてくるようになった。今後の就職活動にも役立つのではないかと持った。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度も、学生が興味がいよいよ増えるように遊戯療法の演習を取り入れながら授業を展開していきたい。また教科書を通して、事例を読み取る力やまとめる力など今後につながる指導を行ってきたい。方法としては今年度と同じ方法で行っていき、もう少し演習を取り入れ学生とのコミュニケーションも深めていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		卒業研究	7名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

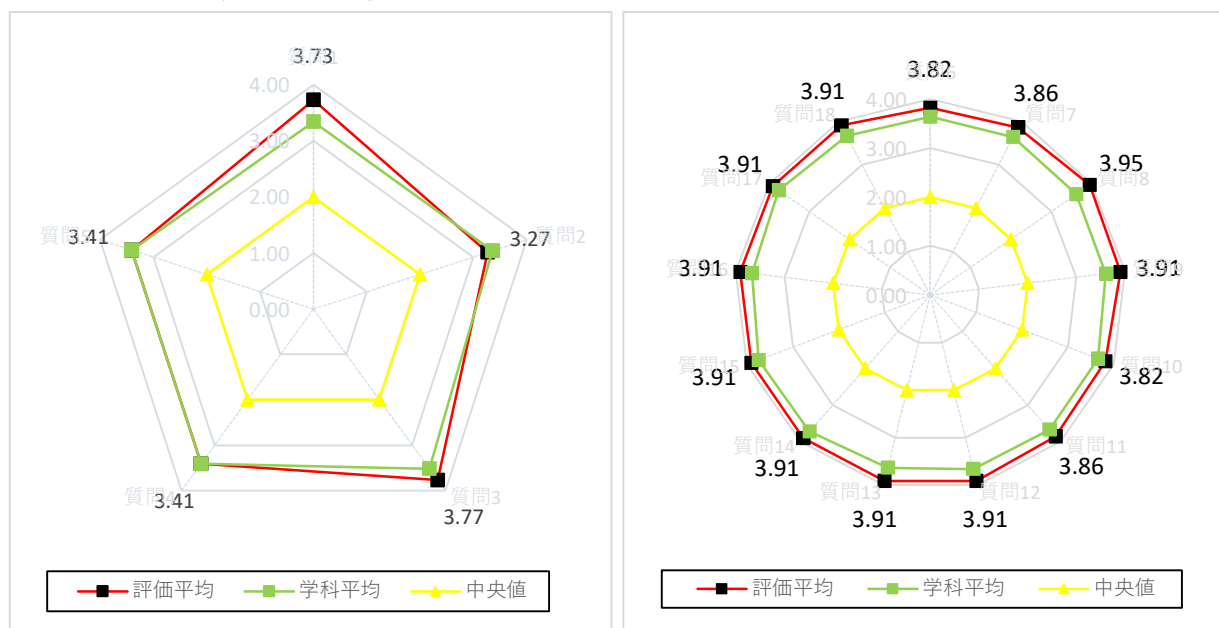
教員は双方向的なやり取りはしていましたか、の項目だけ点数としては、学科平均よりも目立って低くなっている。卒業論文は、出来るだけ書かせる形を採用していた。原則として、先に調査や執筆を進めながら、適時相談するようにうながしていた。しかし、もしかすると、定期的に進捗状況を聞くなどして、双方向のやり取りに心掛ける形がよかったのではないだろうか、とも思う。どうかすると、1人にかかる時間が長くなってしまったりする。また、あまりパソコン等を用いて解説したりしていなかった。

(3) 次年度に向けての取り組み

1人1人に一定の時間をかけながら、進めていくことが必要であろう。そのため、次年度はそれぞれの進捗状況を、提出までの期間を逆算して、数ブロックごとに報告するような形を採用していきたい。そして、その時に、出来るだけ、話しやすい雰囲気を作り、双方向のコミュニケーションが可能になるようにはかりたい。分析方法の解説などは、パソコンを用いてするようにしたい。デジタル機器を用いて、早く効率的に対応できるように促していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		臨床動作法の理論と実践	35名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

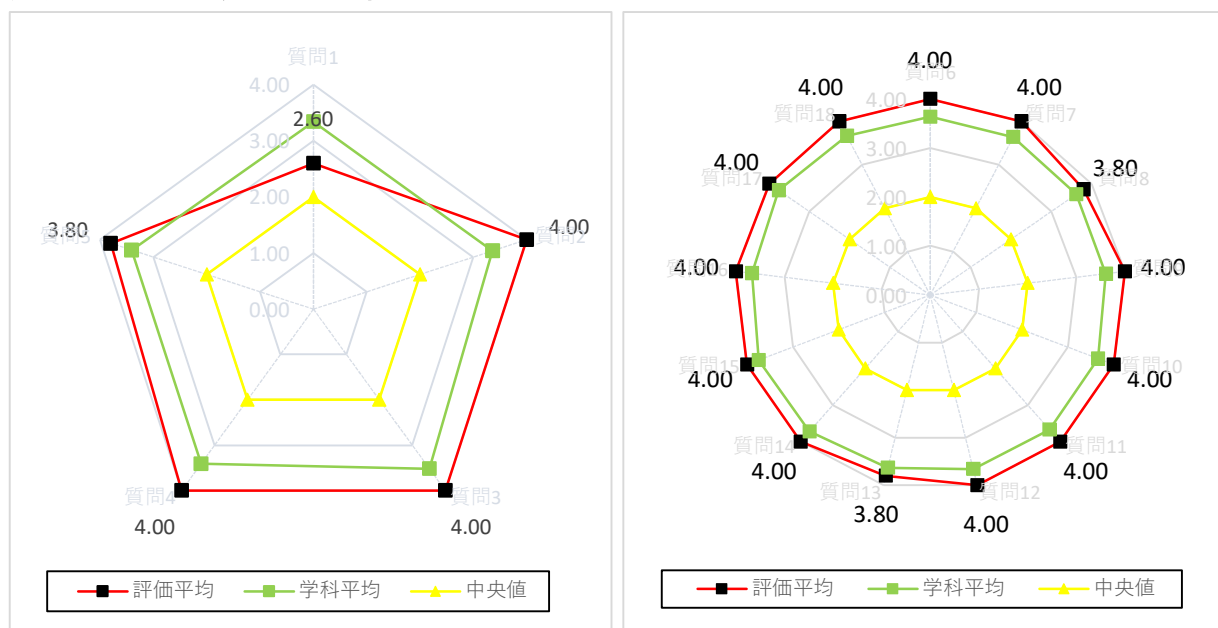
心理カウンセリング学科全体の平均値と比較すると、本授業「臨床動作法の理論と実践」は多くの項目において学科平均を上回っており、特に項目6以降では顕著な高評価が得られた。とりわけ、授業内容の理解度、学習意欲の喚起、授業への満足度に関する項目（8～18）では4前後の高得点が並び、理論と実践を往還する授業構成や、体験的学習を取り入れた点が学生の学びに有効であったと考えられる。一方で、項目2については学科平均をやや下回っており、授業の進め方や説明の分かりやすさ、あるいは学生個々の学習ペースへの配慮に改善の余地が示唆された。全体としては、臨床的専門性を実感できる授業として高い評価を得た一方、初学者への導入的配慮が今後の課題である。

(3) 次年度に向けての取り組み

来年担当せず。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		心理学文献講読Ⅱ	7名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

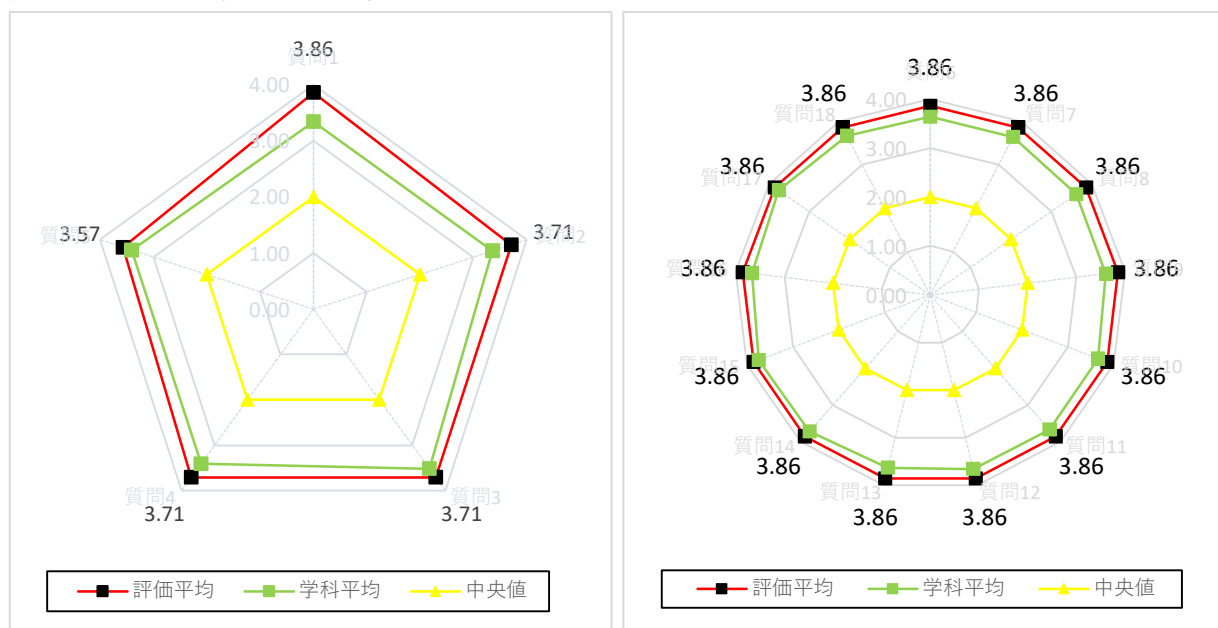
授業内容及び進捗速度について、概ね受講者の満足を得ることができたと考える。ただし、授業欠席者が多い週があり改善が必要である。欠席者が多い週は、その前後に授業で扱った論文が重複していたことが一つの特徴である。論文が重複した理由は、講師が提示した論文の中で興味があるものを各自に選択させているが”子どもへの対応”に関連した論文に対し希望者が複数名おり、連続で発表いただいたことが大きいと推測する。同じ論文でも、各自の興味関心の重点が異なることを推察したが、学生の視点からは、同じ論文ではなく”子ども”に関する別の論文により視野を広げたいと考えていた可能性がある。そのため次年度は、”子どもへの対応”に関する論文を複数準備し、発表者重複の場合は、別の論文を準備する工夫をしたいと考える。次に、扱った論文の内容の難易度がやや高いものであった週である。この論文”アセスメントとセラピーの導入（精神分析の視点）”の発表を希望者がおらず、講師が解説をしたものの、全体の論文内容からみても難易度が高いものであり、受講者の興味をひかなかった可能性がある。次年度は、理解しやすい論文を選択し対応したいと考える。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度は、第1週目に、授業で扱う論文の紹介を簡単に講師より行い、授業で扱う内容の概要を知っていただくこと、そして、本講義から何を不得欲しいのか（論文を研究・臨床へ繋げる視点、社会で生き抜くための仕組みを知ることやセルフケアに活かす視点等）を紹介し、初回の段階で授業の枠組みを伝え、学生のモチベーションを高めたいと考えている。第2週目には、研究や臨床に繋がる論文の読み方について論文をもとに紹介し、以降の学生のプレゼン方法の参考に出来ればと考えている。また、講義ごとに、講師より補足資料をもって説明する時間を設けているが、その時間を短時間にとどめ、グループディスカッションの時間を設けることにより、学生同士の意見交換の活性化を図りたいと考えている。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		キャリアアップ講座Ⅲ	8名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

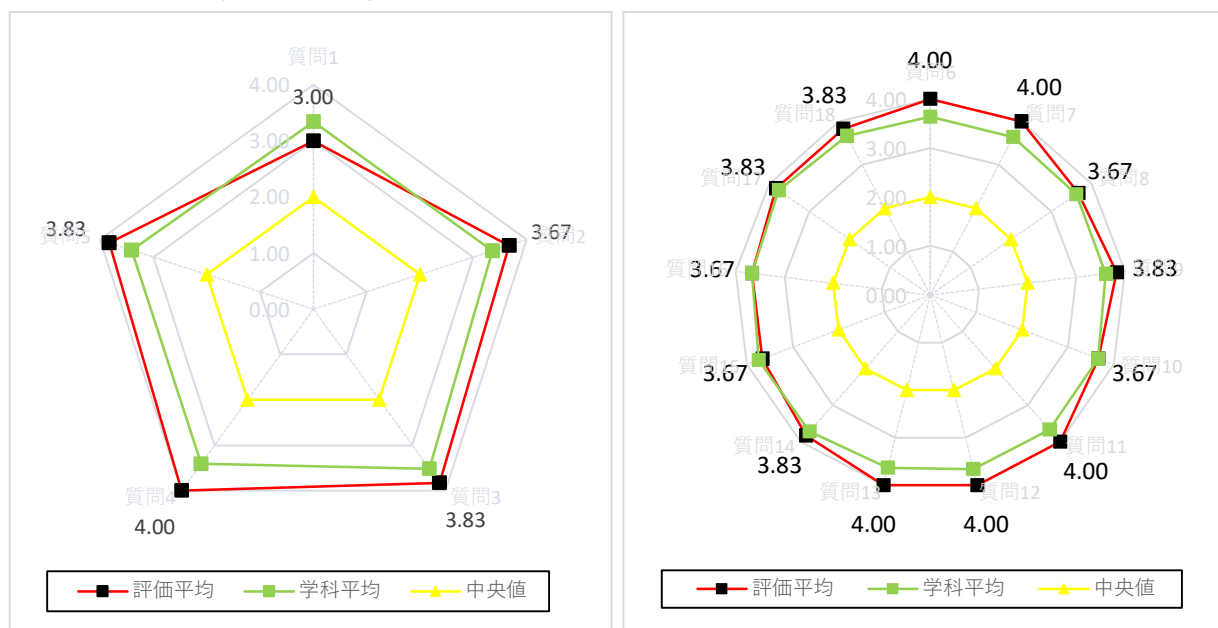
本授業「キャリアアップ講座Ⅲ」の授業評価平均得点は、全18項目において心理カウンセリング学科全体の平均値を上回っており、特に多くの項目で3.86と高い評価を得ることができた。これは、学生の主体的参加を促す授業構成や、実際のキャリア形成に直結する内容、具体例を用いた説明が理解促進につながった結果であると考えられる。一方で、項目5については他項目と比較してやや低めであり、学生によって授業負担感や到達感に差があった可能性が示唆される。総じて、授業の目的設定、内容の実用性、教員の関わり方については高く評価された一方、個々の学生の学修状況により配慮した支援の必要性が明らかになったといえる。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度担当せず。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		キャリアアップ講座Ⅳ	47名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

本講座は、本学学部生を小城市内小学校へボランティアとして派遣し、通常学級に在籍する困り感のある児童等に対して、担任等との連携を図りながら支援する。その体験を通して特別支援教育における支援のあり方や関わり方等子どもとの理解を深めることを目的にしている。今年度は、24名の学生が参加し、小城市内の8つの小学校に数名ずつ配置して1年間の活動を終えている。週に3時間程度で各教室に入り、子どもたちと触れ合いながら授業のサポートや遊びを通じた関わりなど多くのことを学ぶ機会となっている。

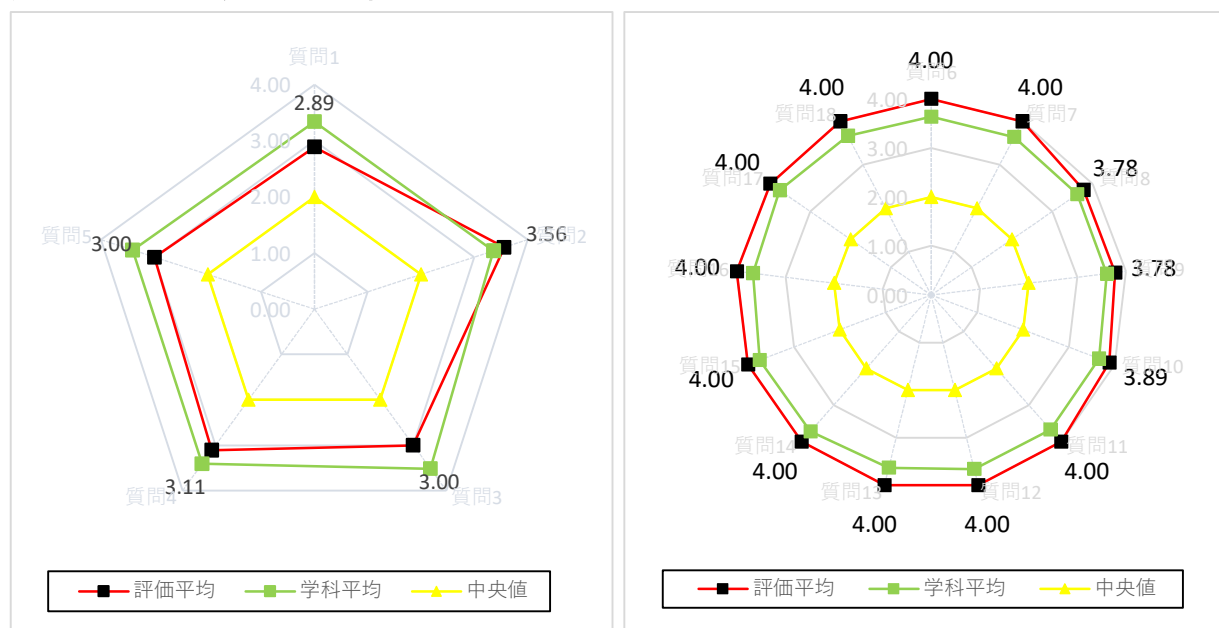
この4年生の時期は、卒業論文執筆や就職、進学に向けての準備など忙しい時期であり、学生の中にも当初不安がみられたが、学生の評価をみると学科平均を上回り、高い評価となっている。実際に教育現場に入り子どもたちに触れ、教職員との関係を取りながらの支援は、自己成長にもつながっており、終了後の報告会では、成長した姿に触れることで青年期の自我形成に役立っていることを感じる。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度も、今年度同様に小城市内の8つの小学校に4年生を配置し（20名前後）活動を行っていききたい。多様化している子どもたちの現状を踏まえ学生の不安軽減のために、活動日誌から状況を把握する。年2回程度は報告会を設け話し合いができるようにしていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		セルフマネジメントゼミ ナールⅡ	10名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

受講者10名中9名より回答を得た。授業最終回に時間を確保して回答を促したことが回答率の高さにつながったと考えられる。

本講義はゼミ指導・個人指導と学科全体での授業形式とが混在しており、ゼミ指導においても各教員の指導体制が揃うよう、事前に調整を行って授業が行われた。後期は、学生が自らの興味があるテーマについてのレポートのまとめや発表を行うための指導の時間と全体でのキャリアプランニングのための授業とが大きな柱であり、各学生の主体的な取り組みを求めることが多かったため、学生による取り組みの差が学生の自己評価（質問項目1～5）に影響したと考えられる。一方で、教員が授業教材等を準備して行うような授業ではなかったため、教員に対する評価としては、一部回答しづらい項目もあったと思われるが、平均より高い評価を得た。今後も学生の立場に立って分かりやすい説明や指導を心掛けたい。

次年度以降も授業最終回に十分な時間をとって授業評価に取り組めるよう、計画を立てていきたい。

(3) 次年度に向けての取り組み

今年度同様授業担当するすべての教員で授業内容や教授方法などについて十分話し合いコンセンサスを得る時間をとることで、より分かりやすい授業構成につなげたい。また、学生のためになる、より適切な教材の検討などさらなる内容の工夫を行えるよう準備を行っていききたい。

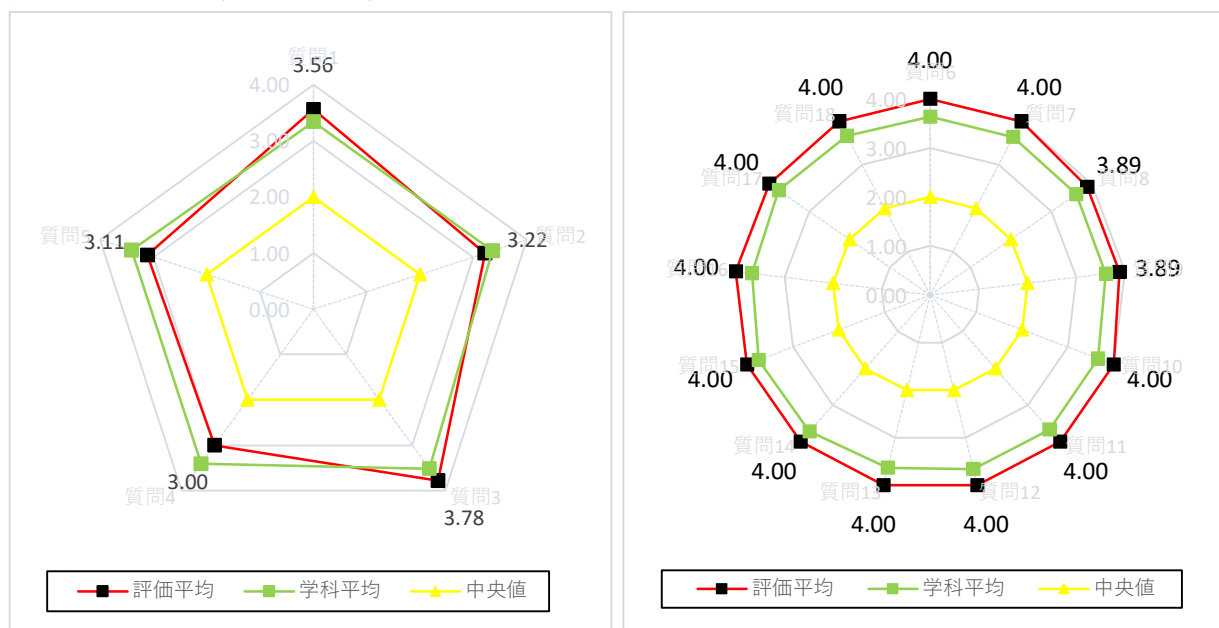
ゼミ指導内では、個別ゼミ指導で使用した教材や取り組んでいる内容が卒業論文に向けてどのように関連するかなどの見通しを詳細に伝えることで、課題に取り組むモチベーションを上げるよう工夫したい。

令和7年度、個別指導を細やかに行うことができたが、学生の取り組み状況に影響される部分もあったため、モチベーションを高めるような働きかけを行って生きたい。資料提示の工夫や全体指導・個別指導、授業外課題などをバランスよく行うことで学生の学修の向上につなげたいと考える。

授業評価回答数は、評価に取り組む時間を確保したことで比較的高い回答率が得られたため、次年度以降も最終回に評価のための十分な時間をとれるよう授業計画を行っていききたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		セルフマネジメントゼミ ナールⅡ	10名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

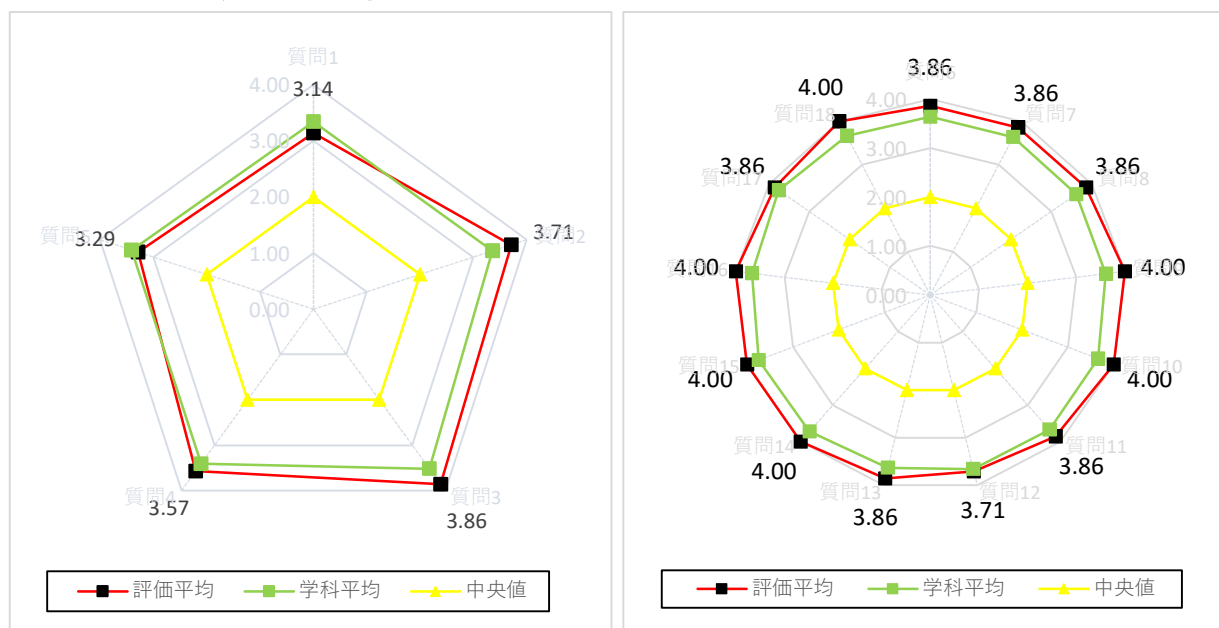
学生一人一人と丁寧に向き合い、ゼミナールを展開していくことが出来たと思う。
授業評価についても、概ね全ての項目において高い評価を得ることが出来た。
引き続き、一人ひとりの学生と丁寧に向き合いつつ、学生－教員間、そしてゼミ生同士の双方のコミュニケーションを大切に、より充実した学びを提供できるよう努めていきたい。

(3) 次年度に向けての取り組み

ゼミ生の中には、欠席が続く学生やレポートがなかなか期限内に提出できない学生もいた。
個別の配慮や指導がより必要になる学生もいるため、個々の進捗状況を丁寧に読み取りながら、丁寧な指導を心掛けたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		心理専門ゼミナール	7名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

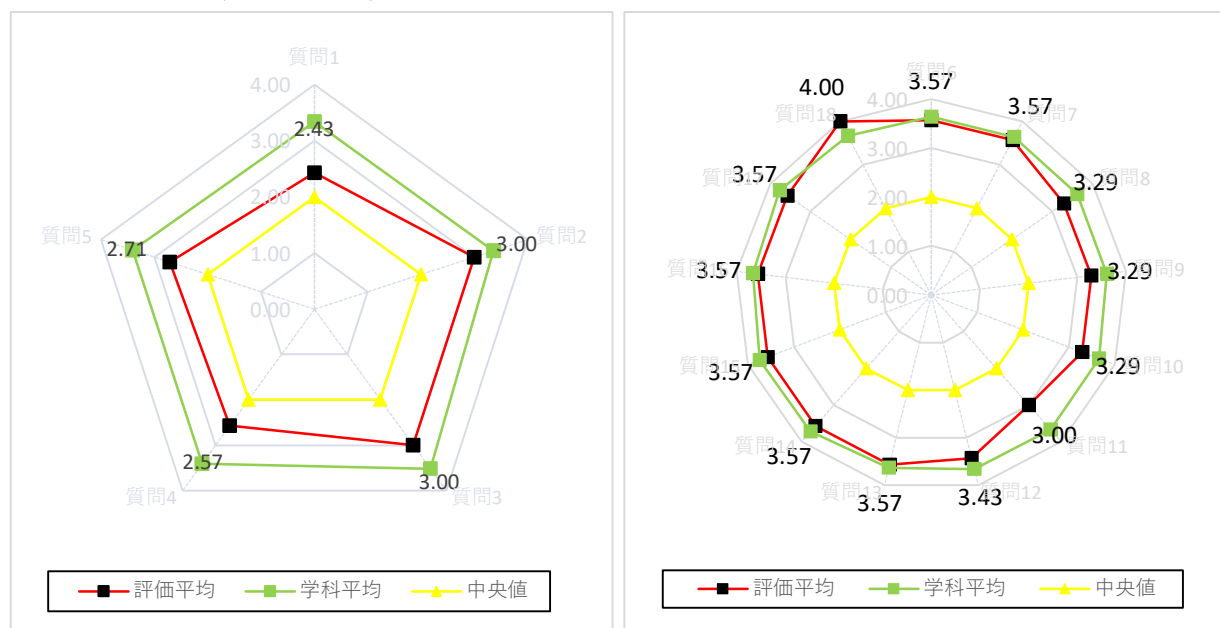
概ね高い評価を得ている。しかし、「声の大きさ・明瞭さ・話す速さは適切でしたか。」の項目が、やや気になる。この点に関しては、はっきりと話したり、適切な音量で伝えるなどしていく必要があるであろう。

(3) 次年度に向けての取り組み

概ね高い評価を得ているため、次年度も継続していきたい。「声の大きさ・明瞭さ・話す速さは適切でしたか。」の項目について、注意をしながら、話し方に工夫をしていきたい。大きく話したり、注目できるようなアクセントや間を使いながら、解説していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		心理専門ゼミナール	7名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

受講生より100%の回答を得た。授業14回目・15回目に複数回学生に回答を促したことが100%の回答につながったと思われる。

教員に対する評価については、本科目の進め方が学生の取り組んだ課題への添削指導が主であったため、質問によっては授業形態と合致しない項目があったことが平均点に満たなかったことと関係していると思われる。質問18の総合評価は平均を上回った。自由記述において、スケジュール確認等の見通しのつきやすさや、定期的な個別面談への満足度の高さ、授業での親身な対応について高い評価を得た。提出した課題や発表の際などに適切なフィードバックを行うことを意識して指導を行ったことも評価につながったと考えられる。

前期前半は研究論文を書くにあたってのアカデミックライティングの復習や研究の留意点について文献購読を行った後、前期後半から後期は学生が自分の関心あるテーマについてレポートや発表資料をまとめ発表するという授業を主軸に行った。学生自身の主体的取り組みが求められる授業であったこと、複数回欠席した学生が複数だったことが質問1～5に影響したと思われる。

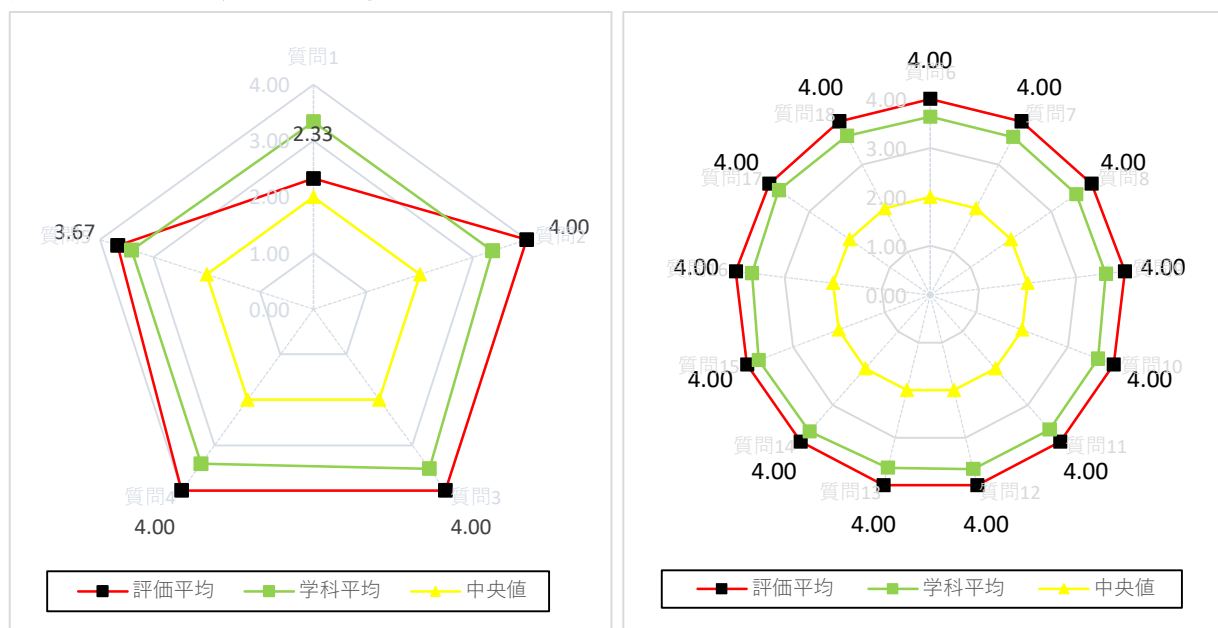
(3) 次年度に向けての取り組み

授業14回目と最終回に学生に回答を促したことで100%の回答を得られた、次年度以降も複数回授業評価に取り組む時間を確保することを意識したい。

次年度も今年度同様に双方向性や公平性、速やかな連絡などに留意しながら指導を行っていきたい。また、集団指導と個別指導のバランスを取りながら、効果的な指導を行うことを意識したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		心理専門ゼミナール	7名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

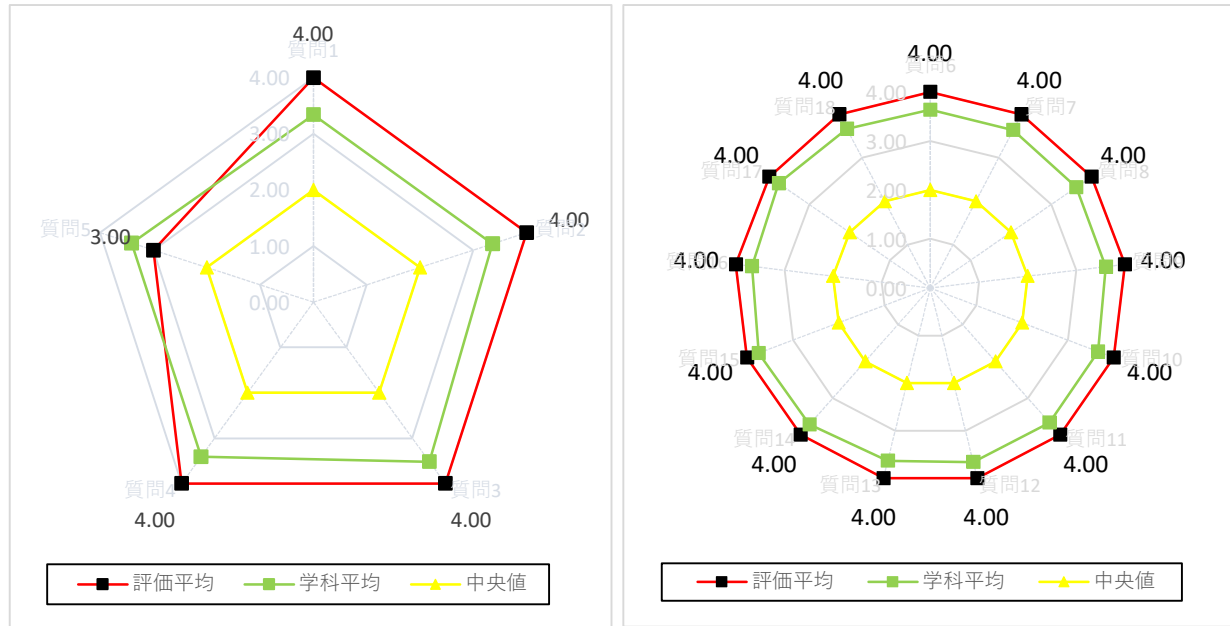
心理専門ゼミナールは、とくに後期は全員集まるより、個別対応が多くなるため常に出席するということが少なかったようである。当初は、今の自分が興味あるものについて、新聞や雑誌から抜粋し、なぜ興味があるのかをみんなで報告会をするという形から始めている。そこから各個人の興味あるものを追求しながら焦点化していった。そういう時間の経過とともに、自分たちで課題を挙げ文献調査など積極的に行っており、自分自身が研究したい分野を見つけながら最終的に卒業研究につなげていく作業ができたと思われる。今年度のメンバーは、臨床心理学の分野に興味を示し、自ら文献等を見つけ興味を示してくれる。定期的に学習状況を発表してもらい、意見交換などを行ってきた。教員との意見交換も十分にしながら、最後はパワーポイントを使って1年間の学習について発表してくれた。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度も、今年度の取り組みを参考にしながら学生主体で学生が興味あるものを学術的に広げ文献等を通して、文献の調べ方やまとめ方、読む力など総合的に学習力をつけていきたいと考えている。その結果卒業研究に向けての意識化を行いたい。そのために、年に2回は学習してきたことを報告してもらい学習力を高めたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		子ども学演習	8名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

この授業で大事にしていることは、親子療育「ぴよっこ」に参加することである。この活動を通して、「障害のある可能性のある子どもへのかかわり方」や「保護者支援のあり方」を学んでもらっている。また、絵本の読み聞かせもすることで、「どうやったら子どもたちを引き付けることができるのか」を考えてもらっている。次に、自分なりの研究の方向性を定めてもらうために、各自で論文等を読み、どんな研究を進めて生きたのかをパワポ資料にまとめ、発表会を行うこととしている。このことを通して研究の素地を培っている。

(3) 次年度に向けての取り組み

とても効果的に指導が行われていると実感しているので、今後もこの形を続けていきたい。